

## 5. 施行 第1段階と第2段階

### —最初の紹介と作業療法インタビュー—

ESI の施行は、初回紹介の時に始まり、そこから、**クライアントの視点から、クライアントに関する情報を集めることになる**。クライアントには作業療法に紹介された人、クライアント群、クライアントグループがある可能性を思い出してほしい。クライアントに関する情報の、クライアントの視点からの収集は、クライアントへのインタビューから始まる。従って、この章では、作業療法インタビューに主な焦点を当てることになる。作業療法士はいつでも、クライアントの作業遂行についての関心事を理解するのに必要な包括的な情報を収集するため、常にクライアントへのインタビューを行わなければならない。そうする事で、治療的ラポートを構築し、協働してとりくみ始めるプロセスに着手する基礎を得ることもできる。

クライアントに包括的インタビューをすることから作業療法評価を始めることは、作業療法士が(a)クライアントの視点から、その人及びクライアント群の他の人達を理解するのに必要な情報を集めること、(b)クライアント群の全てのメンバーと信頼関係と強力な協働関係を築く基盤を提供することを可能にする。

#### 5.1 第1段階— 始めの紹介

ほとんどのケースでは、作業療法士は、全体的なクライアント中心の遂行文脈の確立のプロセスを、紹介の過程で集めた情報に基づいて始める。例えば、作業療法士は、その人の医学的記録を読んで、年齢や性別、疾患について知るかもしれない。

記録には、その人が生きてきた場所や他者との関係（例えば、結婚しているか、家族の支援が得られるかどうかなど）に関する情報も含まれるかもしれない。また作業療法士は、作業療法を探している人や作業療法サービスを求めて作業療法士とコンタクトしてきた専門職チームの他者と話す事から情報収集を始めるかもしれない。

## 5.2 第2段階-作業療法インタビューの概観

クライアントとの作業療法インタビューは、クライアント中心で作業中心の実践の基礎を提供する。表 5-1 は、ESI 実践の中で行われる作業療法インタビューの概観を示している。良<sup>い</sup>作業療法インタビューは、**固定的な、規定された順で行われるのではなく、自然な流れでの、対等な立場での会話や二者間の対話として行われる**ことを心に留めておくのは大切である。しかしそれは、焦点の目的を保った会話である。焦点は、いつもクライアント中心で作業中心である（Fisher, 2013）。最終的な目的は、作業療法サービスにおけるクライアントのニーズを明らかにする事である。ESI の観点から見ると、目的は、ESI 観察が必要かどうか、もしそうなら、どのようなタイプの社交場面が適切であったり、問題があったりするの<sup>か</sup>についての情報を集めることである。このことは、インタビューの目的を保つために十分な構造と、クライアントによって共有される情報に沿って展開する柔軟性を作業療法士が提供しなければならない事を意味する。作業療法士は積極的に聞き、話されている内容に十分な注意を払い、短い時間の間に必要なすべての情報を集められるようにガイドしなければならない。

もし、クライアントが社会交流に関する問題を持っているならば、作業療法インタビューの最終的な目標には、ESI 観察が必要かどうか、もしそうなら、どのようなタイプの社交場面が問題かを明らかにすることが含まれる。

表 5-1 作業療法インタビューの段階

**作業療法の特性と目標を言う**

- クライアントが作業療法の広い領域を理解することを援助する
- 私たちの焦点は、人々が目的を持ち、満足をもたらすと知覚した活動への参加を助けることに当たっている。その人やクライアント群の他の人たちに関係しているかもしれない例を提供することは、クライアントが必要としている、あるいはすることを楽しんでいる課題についてより広く考えるのに役立つ。例えば、クライアントに作業療法士の役割は、人々の職業復帰、毎日のセルフケア、家を維持するような課題（買い物、銀行に行くことなど）や望むレジャー活動（例：カードゲームで遊ぶ、友だちとゴルフをする、昼食の間、友人と社交する）への参加ができるようにすることであると言うことができる。

**全般的なクライアント中心の遂行文脈の確立**

- クライアントと作業遂行に影響を与える要因をより理解するためのクライアントの環境についての情報を集める
  - 外的要因
    - 環境
    - 制度
    - 社会
    - 文化
    - 時間
    - 役割
    - 課題
  - 内的要因：
    - モチベーション
    - 適応
    - 文化
    - 時間
    - 役割
    - 課題
    - 心身機能

**同時に治療的信頼関係と協働関係を発展させる**

- クライアントの知識と自己主張を尊重する質問をする

- その人とクライアント群の人たちを尊敬する
- クライアントの環境と感情を尊重する; 解釈や予断があればそれが妥当であることを確認する
- クライアントの状況と望む結果を支持する
- その人の目標と希望を尊重する
- パートナーシップを確立し、望む変化を促すように共に取り組むことを決意する

#### クライアント中心の遂行文脈の資源と制限を明らかにする

- ESI 観察結果の解釈と介入計画を立てるときに後に役に立つだろう情報を聞く
  - 物理的環境がどれくらい遂行に影響を与えるかを表す情報を考慮する
    - 環境への慣れ
    - 環境によって決まる構造と支援
    - 環境内の雑音レベル
  - 様々な社交相手がどれくらい遂行に影響を与えるかを表す情報を考慮する
    - 社交相手との親しさ
    - 社交相手の社会交流技能のレベル
  - 制度、文化、人の要因がどれくらい遂行に影響を与えるかを表す情報を考慮する

#### クライアントが報告した作業遂行の強みと問題点で、社会交流の問題に関連するものを明らかにする

- クライアントにとって関心がある、難しい社会交流のタイプを決める. 以下のことを考慮する：
  - 意図された交流の目的
  - 社会交流が行われる状況の特徴
  - 社交相手の特徴

#### ESI を施行するかどうか決める

##### ESI の特性と目標を言う

- 関心がある社会交流を含む課題を、その人が遂行するのを観察することの重要性をクライアントが理解するように助ける
  - ESI の焦点は、個人的 ADL、手段的 ADL、仕事、レジャー、学校、家族、地域生活の領域の中で遂行を維持するために、クライアントにとって重要で、クライアントが希望する社会交流に当たっている

#### クライアントが評価と潜在的介入として優先したい社会交流のタイプを明らかにする

- 作業遂行や拡大する参加の改善のために、最も重要な社会交流のタイプをクライアン

トが明らかにするように助ける

- クライアントと共に、作業療法士にとって評価として観察することが最も有用であり、介入計画の時に潜在的な目標となる社会交流のタイプを決める

#### 社会交流観察の計画を立てる

- 観察実行のために環境上関連した状況を計画する
  - 自然な状況（例：銀行、食料品店、休憩室、夕食の食卓）
  - 代表的な社交相手（例：銀行の窓口係、事務員、同僚、友人）
  - 全ての人が含まれるために都合の良い時間
- 評価時の作業療法士の役割についてクライアントに伝える  
作業療法士は以下のことをするだろう：
  - クライアントと交流しないが観察する
  - 観察の間、メモをとる
  - 観察結果を後日クライアントに伝える

### 5.3 作業療法特徴と目的の枠組み

作業療法実践は幅広いので、クライアント（と私たちの同僚）に、作業療法の独自の焦点や、私たちがすることが何かを理解してもらうのは、いつも挑戦である。私たちの実践の場が何であれ（例：学校の、地域の、病院ベースの；人に、組織に、社会に焦点を当てた；健康、予防、発達、リハビリテーション；子どもの、成人の、高齢者の；健常者の、発達障害の、神経疾患の、精神疾患の、認知障害の）、私たちが協働する人々が、社会に十分参加するために、したい、する必要のある日常課題を遂行する事ができるようにすることに、私たち独自の焦点はある。

私たちは各自、自分が何をするかを説明する方略を持っているかも知れないが、人々が、社会交流や他者との社交を含む、社会の中で、望むレベルで参加をするために必要とされる、仕事、教育、レジャー、個人的手段的 ADL、社会的といった課題の遂行に私たちの焦点があることを強調することには、複数の利点がある。

- 1 作業療法の焦点が作業（すなわち、日常生活課題遂行）にある事を明らかにすることは、人の作業遂行の質を評価する事を可能にする、作業を基盤とした作業中心の評価を、紹介し使用するのに必要な土台を提供する。
- 2 最大のレベルで社会に参加するために必要とされる、日常生活課題遂行を可能にする事に焦点をあてることを強調する事で、クライアントにとって重要な作業遂行に焦点を当てた、クライアント中心のゴールをクライアントと協働して作成することが可能になる。
- 3 クライアントやその他の人に、作業療法士が通常の日々の生活での作業への結びつきを可能にするよう支援することを知らせる事で、作業療法サービスの焦点を変化させ、私たちの可能性を広げる。例えば、はじめのうちは、焦点はセルフケアかもしれないが、次第にレジャーや仕事の事に発展するかもしれない。
- 4 私たちの焦点が人の作業遂行の質にあることを強調する事で、どの“doing”がより効果的であるか、効果的でないかをより理解するために、私たちが、作業遂行技能（つまり、運動、プロセス、そして/または、社会交流）を評価する理由を明らかにできる。

我々特有の焦点は、可能な限り望ましい社会参加のために必要な、仕事、学業、余暇、個人的あるいは手段的 ADL といった課題を、人々ができるようになることである。それは、社会交流や他の人たちと交際することを伴う課題も含まれる。我々の特有な焦点を明らかにすることは、(a)何をどう評価するかを計画する、(b)クライアント中心の作業を基盤とした目標と介入計画を設定する、というプロセスにおいて、より効果的なクライアントとの協働を可能にする。

## 5.4 全体的なクライアント中心の遂行文脈を確立するプロセスを続ける

クライアントに作業療法を紹介した後、クライアントとその状況について情報を集め続けるが、クライアントの視点から情報を集めることに明らかな焦点がある。この情報によりクライアントの役割、以前の作業や、望まれる作業、作業遂行に影響するかもしれない要因についてより理解することができる。

Fisher (2009; Fisher&Nyman, 2007) は、作業療法士が (a) 情報を収集し、(b) 十分な情報が収集できたかを確かめるための、全体的なガイドとして10側面を考える事を提案している。つまり、10側面は、質問する事を特定することを意図した物ではない。むしろ、議論される全体的なトピックを提案し、クライアントからの情報をまとめるためのものである。**これらの10側面についての情報を手に入れ、まとめることは、作業療法士がクライアントをクライアントの視点から完全に理解することを確実にする。**このプロセスを通して、作業療法士は、クライアントの遂行文脈の中で、外的内的な資源と制限に気づき、どの作業遂行をクライアントが適切だと感じ、どれが作業遂行の比較的強みと問題になるかについて知る事ができる。

### 5.4.1 クライアントの遂行文脈を決める外的要因

遂行文脈には内的なものとの外的なものが含まれる (表 5-1 参照)。

**外的要因**には、心理社会的環境、社会的期待と統制、社会関係の質、文化的影響、時間的要素 (時間帯)、役割期待、課題の要請の特徴が含まれる。環境の情報を集めることは、日常的な状況に存在する典型的な人々や、彼らがクライアントの遂行をどのように支援または妨害しているかについて、作業療法士に情報をもたらす。環境には、空間的特徴や騒音のレベルのような、遂行を促進したり妨害したりする物理的特徴もある。

クライアントに対する社会的期待や、作業遂行における、文化や時間の要素の影響を理解する事も重要である。最後に、社会交流について考えるときには、社会的地位の側面が特に重要である。

なぜなら、この側面は協働やその人が、クライアント群の人たちを含む他者との関係の質と関わりがあるからである。

#### 5.4.2 クライアントの遂行文脈を決める内的要因

**内的要因**には、動機、適応、内在化された文化的価値、内的時間の要素（例、年齢）、内在化された役割期待、日常生活を送り最大の社会参加をするためにどの課題が適切で重要とクライアントがみなしているか、心身機能、といったことが含まれる。作業への結びつき、興味、個人的なゴールに対する“内的動機付け”の程度は、評価の過程や後のゴール設定をガイドするので、動機は特に重要である。社会交流に関する事を含む、過去の作業的困難に、クライアントがどのように対処してきたかを知ることは、何が過去の成功に寄与したかや、変化のためのクライアントの潜在力を予測するのに役立つだろう。

#### 5.4.3 インタビューの焦点を社会交流にあてる

作業療法士がクライアントについて学ぶとき、クライアントの遂行文脈を決める内的外的要因や、どの日常生活課題が最も重要かと同様、クライアントの社会交流と他者との関係について作業療法士も考えるということが重要である。すなわち、**たくさんの日常生活課題が、社交や、コミュニケーションや、他者との協働を含んでおりしばしば重点をおいている**ということである。いつ行われる場合でも、作業療法インタビューはクライアントの社会交流に関する問題に関する質問を行う必要がある。

**私たちは、作業療法士が、はじめに、広い、“鍵となる”、開放型の質問をし、それから必要なら、より具体的な質問に移行し、より詳しい情報を集める事を推奨する。**開かれた質問からインタビューを始めることで、人やクライアント群の他者を独自の個としてより良く理解するのに必要な、クライアントに関する背景情報が得られやすくなる。そして、クライアントがしていた作業やしたい作業に関するコメントをひきだす、もっと具体的な質問を続けることで、作業療法士が短い時間にたくさんの情報を集める事が可能になる。

社会交流についての開かれた議論を可能にする、開放型のコメントや質問の例には次のようなものがある。

- 「仕事であなたはたくさんの人と関わっているようですが、それはうまくいっていますか？」
- 「ご主人や娘さんが多くの援助をしてくれるとおっしゃっていますが、彼らとの“協働関係”はどうですか？うまく言っていると思いますか？」
- 「あなたはもっと外出して友達と集まりたいとおっしゃいましたが、社交においてあなたが現在難しいと思っていることは何ですか？」
- 「学校で一番仲がいい人は誰？誰と遊びたい？友達と遊んでいると楽しい？彼らはいい人たち？遊ぶのが大変だと思う事はある？」

続く質問は、クライアントが参加する典型的な状況や、誰がそこにいるか、その頻度、社会交流のタイプ、クライアントがその交流に満足しているかどうかについてかも知れない。

このセクションでは、クライアントと社会交流の問題について話すことは難しくないと述べてきている。しかしながら、作業療法士やクライアントが、このような直接的なやり方で、社会交流の問題に焦点を当てるのを不快に感じることもしばしばあるかもしれない。セクション5.9.1では、このようなクライアントと話し合う方略についてより詳しく記述している。

多くの作業療法士は、彼等やクライアントが社会交流について話し合うのは不快かもしれないと懸念しているけれども、クライアントのほとんどは、我々が仮定するより、ずっと自らの問題について話し合うことにオープンである。彼らは社会交流や他者との関係に関する苦悩についてオープンに話しあうことができた相手に、感謝を表すこともしばしばである。

#### 5.4.4. 作業療法サービスを受けている人へのインタビュー

作業療法士が、既に知っているクライアントの社会交流技能を評価したいと考えるケースも多い。よくあるのは、**その人が既に作業療法士の担当クライアントで、**現在作業療法サービスを受けている場合である。このような場合、作業療法士は既にインタビューを終えているだろう。したがって、作業療法士は全体的なクライアント中心の遂行文脈に関する更なる情報収集を必要としないかもしれない。つまり、作業療法士は、社会交流の問題を取り上げ、最も問題と思われるタイプの交流に焦点をあてることだけが必要である。

作業療法士が、**その人（あるいはクライアント群の他者）と過去に協働した事があり、**フォローアップに訪れたり、作業療法サービスに再紹介になったりする場合もある。このような場合は、クライアントとの作業療法インタビューは、前回終了してから何が起こったかについて知ることが重要になる。インタビューの長さや焦点は、どのくらいの時間が経過しているか、その人の日常生活にどのくらいの変化が生じているかによって異なるだろう。

#### 5.4.5 健康な人や、現在作業療法サービスの必要がない人へのインタビュー

作業療法士が、健康な人や現在作業療法サービスを必要としない人を評価する必要があることも時々あるだろう。これらの人々は、子どもかもしれないし大人かもしれないが、大半は社会交流に関する障害や問題のない人たちである。例えば、**作業療法士が、標準データを集める場合や、コントロール群の評価を必要とする研究を行っている場合である。**

このような場合、作業療法士はクライアント中心の遂行文脈の全体的な理解をする必要はほとんどない。作業療法インタビューのこの部分は、作業療法の特徴と目的を明らかにし、作業療法士がその人の社会交流の質を評価したい理由を明らかにし、どの社会交流のタイプが最も評価に適切かを決定する以上には、必要ないかもしれない。

## 5.5 治療的信頼関係の発展とクライアントとの協働の開始の過程を始める

先にも述べたように、インタビューは評価の方向性と、必要であれば介入計画とをガイドする重要な情報を提供する。クライアントと、治療的ラポートや協働関係を構築するメカニズムでもある。もちろん、他者とのラポートの築き方やよい協働関係の作り方に定式はない。クライアント群を含むそれぞれの人を、独自の価値観を持つ個人として尊重しながら、というのが出発点になる。尊重は言葉や、ジェスチャーや、ボディランゲージによって伝わるものかも知れない。最も大切な事は、**クライアントに必要な時間を取り、積極的に聞くことが、クライアントを理解したい、協働したいという願いを伝える最も効果的な方略かもしれない**ということだ。(Tickle-DeGnen, 2008)

その人やクライアント群の他者と、信頼関係と肯定的な協働関係の構築を促進するための方法には、倫理にかなったやり方で、その人たちと会うということが含まれる。これは私たちが次のことをすべきだということである。

- その人の視点からその人の状況を捉えるようにする
- 彼らと協働的に取り組むことを通して我々が達成したいものは何かを明らかにする。
- 他の人達が我々と会いたくなるように、彼らと会うよう心がける。

## 5.6 クライアント中心文脈の中の、資源と制限を明らかにする

これまで述べてきたように、クライアントへのインタビューで得られた情報は、作業療法士に、クライアントとクライアントをとりまく状況に関しての大きな図を提供する。クライアント中心文脈の中で、資源と制限を明らかにする段階は、簡単にいうと、

クライアントの作業遂行を、促進または制限すると思われる外的内的要因に関する、インタビューの間に集められた、主要な情報を要約する事を含む。社会交流で特に重要なのは、(a) クライアントが結びつく必要がある、そして/または、希望する社会交流のタイプと (b) どのタイプの状況やどのタイプの社交相手との間で、その社交が起こるかに関係する広範な情報である。人の社会交流の質の評価が必要と判断されたときには、より細かい情報が必要になるだろうけれども、特定の社交相手や状況がどのように社会交流を促進したり妨げたりする傾向にあるかを、クライアントが明らかにしてくれるかもしれない。どの要素が最もクライアントの社会交流に影響を与えるかを知ることは、どのタイプの社会交流を観察の対象とするか、どのタイプの状況で観察を行うかに影響を与えることになるので、重要である。

例えば、カールは仕事で経験している問題のために、作業療法に紹介になった。カールとの作業療法インタビューに続いて、作業療法士は学んだことを要約した。彼女はクライアント中心の遂行文脈の中で、どの外的内的要因が最もカールの作業遂行を促進し制限するかを考えた。重要な資源は、カールには理解のある上司がいて、彼を雇い続けたいと思っていることだと思われた。しかし、一方で上司は、カールへの顧客からの不満が増えているため、一時解雇する必要があるかもしれない事で悩んでいた。作業療法士は、社会交流を含む作業遂行を考えると、どのタイプの社会交流が適切に見えるかと、最も重要と思われる状況や社交相手があるかどうかに関心をあてた。

より具体的には、彼は技師として働いているが、仕事を辞めるリスクにさらされている原因は、彼の“態度”や、粗野で失礼な行動について顧客から寄せられている苦情であることを作業療法士は知った。彼は、多くは顧客の家で交流するが、時間や仕事内容についてはじめの予約は電話で行っていた。カールが行う必要のある他のタイプの社会交流には、顧客が何をしたいかを明らかにして、いろいろな選択肢に関する適切な情報を提供する事が含まれていた。

より小さな仕事では、カールは、顧客と関わるだけで、しばしば1人で働いた（彼はこれを好んでいた）。より大きな仕事では、カールは1人か2人の同僚と働く必要があった。このような状況では、誰が何をするかを決める必要があった。時々仕事は分けて比較的個別に仕事をするようなこともあったけれども、多くは、一緒にチームとして働いていた。彼と同僚は、お茶を飲むことや、昼休みをとって雑談をすることもあった。

作業療法士がカールに、社交相手によって問題の大きさが異なるかと尋ねたとき、彼は特に“女性の客がくだらない質問をするときイライラ”を感じ、同僚と働いているときはより簡単だと述べた。彼は“私は仕事を続けるために、する必要があることをしたい”とも言った。

## **5.7 社会交流を伴う課題遂行を含むクライアントの作業遂行の報告された強みと問題をあきらかにする。**

クライアント中心の遂行文脈の中で、鍵となる資源と制限や、どの作業遂行が適切で問題となりうるかに関する情報を収集することに加えて、クライアントインタビューの最初の部分のもうひとつの重要な成果あるいは目標は、強みである作業遂行と問題となる作業遂行をクライアントが明らかにできるようにすることである。

このプロセスの間、作業療法士とクライアントは協働して、社会交流に関する作業遂行について、社会交流の構成要素が強みか問題かについて考える。例えば、その人は料理が問題だと言うかもしれないが、深く明らかにして行けば、友達と料理するときだけに問題を抱えていることが作業療法士にわかる可能性もある。注意深いインタビューで、知らない人と話すときにも問題を経験していることが明らかにになるかもしれない。

情報を集めるプロセスが進むにつれて、作業療法士は能動的に聞く必要があるし、その人にとって重要な特定のタイプの社会交流と現在の困難に対して、焦点を当てて質問する必要がある。

社会交流のタイプは、以下の意図された目的に分類される（1章 1-2 の表も参照）

- 誰かから情報を収集する（GI）
- 誰かと情報を共有する（SI）
- 問題解決/意思決定（PD）
- 協働/生産（CP）
- 物やサービスを得る（AG）
- 物やサービスを提供する（PG）
- 社会的会話/世間話（CS）

*どのタイプの社交場面が最も困難かを明らかにするのは多くの人にとって難しいことを強調するのは重要である。例えば、人は公式な夕食会や馴染みのないビジネスパートナーと社会的交流をする事を難しいと思うかもしれない。しかし、その人の社会交流の質はその場面でとても良いかもしれない。反対に、多くの人たちの社会交流の質は、親しい社交相手と“世間話”をするときには低くなる。けれどもそのような社交場面は“より簡単”と受け取られるかも知れない。それゆえに、評価対象となる人が価値を置いている作業の領域に**関係のある社交場面のタイプを、クライアントが明らかにすることができるよう作業療法インタビューを組み立て、それから、それぞれのタイプの社交場面に問題があるかどうか**に焦点をあてる**ことが大切である。***

*例えば、カールにインタビューを始めて、作業療法士は、彼が、いくつかの異なるタイプの社会交流をするべきであることがわかった。-顧客の家に行き望まれた仕事をするための時間を決める（問題解決/意思決定）、顧客がしたい事を明らかにする（情報収集）、顧客に色々な可能な選択肢を伝える。（情報提供）、誰が何をするかを決めるために同僚と協働する（問題解決/意思決定）おしゃべり（社会的会話/世間話）*

インタビューのこの時点では、作業療法士は、カールが女性の顧客と交流する時にイライラし、同僚と関わる時は問題がないらしいことだけを知っていた。実際にどのタイプの社交が最も困難なのかを明らかにするために、さらに次のように尋ねた。“あなたはときどき女性の顧客と交流すると「イライラする」と言っていましたね。もっとそのことについて教えてくださいませんか？あなたが困難を感じる状況の例を教えてください。”

すると、カールは作業療法士に次のように言った。“私が忙しく仕事をしているときに、時々やってきて「どんな具合？」と尋ねてくる。私はそれが好きではないけれど、いつもこのように答える。「いいかんじです。もうすぐ終わります。」そうすると彼らは去って、私は一人になれる。しかし、壁や天井といった、ランプを取り付けたい場所について、彼らが私に言おうとする時、私は本当にイライラする。彼らは配線がどこにあるかなど何も知らない。彼らの置きたい場所にランプを置いて点かないだけだ。」

この情報から、作業療法士は、カールは情報提供を含む短い社交場面のほうが得意で、問題解決/意思決定や協働/生産はより難しいようだと考えた。確かめるために、彼女はカールに”顧客がランプのつけ場所を言いたい場合の状況をもっと教えてくださいませんか？”と頼んだ。カールは、彼が顧客の家を訪問して、台所の天井のある場所にランプをつけたいと言ってきたとき“私はどこにつけると一番いいかわかるし、女性たちがどう思っているか、細かく話し合うような事が好きではない。しかしどうにかしないと彼らは苦情を言い続け、私は仕事を失うだろう”といった。カールとこの話し合いをし、作業療法士は、問題解決/意思決定を含む社会交流が、カールにとってもっとも問題となる社会交流であると考えた。

評価のターゲットとなる社会交流のタイプを判断するとき、クライアントが価値を置いているそして/または、その人がする必要がある、意図された目的を含む、社交場面であることが最も重要である。

## 5.8 ESI を施行するかどうかの判断

もしクライアントが社会交流を問題のある領域だと認識している場合、ESI を施行する理由がある。第1章セクション 1.5 で述べたように、ESI 施行を考えない理由は、年齢（2歳以下）か、話し言葉や手話を使ってコミュニケーションしようとしないうか、できない人であるということだけである。もちろん、評価対象となる人は、他者との社会交流を観察されることに同意しなければならない。

## 5.9 ESI の特徴と目的

もしクライアントが社会交流を含む課題を重要だと考えている場合、作業療法士は、インタビューから ESI の施行へ移る事ができる。この移行の際に、作業療法士が、その人が社会交流に関連する課題を行っているところを観察する機会を持つことで、クライアントが経験する問題の性質をよりよく理解できるということを伝えるべきである。それから、作業療法士は、標準化された評価を用いて (a) 二つの異なる社会交流を観察すること (b) その日との社会交流技能にとってよりよいアイデアを得ることが可能であると、彼または彼女に紹介する事ができる。人がこのような評価をすることに同意した場合、作業療法士は、どの交流が一番ふさわしいか決めるための詳細を得るために、もう少しインタビューを続ける必要がある事を伝えることができる。

ESI を紹介することで、クライアントに、社会交流を含む異なる課題を行う間にその人を観察する事で、作業療法士がその人の問題をより良く理解できるという考えを示す事ができる。

### 5.9.1 社会交流について話す事が苦手あるいは不快なクライアントと社会交流について話す

時々、人やクライアント群の他者が、その人の社会交流の質について、社会交流という言葉を用いて話すことをいやがる事がある。このような場合には、作業療法士は、クライアントと中心の観点から、クライアントが聞きやすい言葉を用いることができる。ゆえに、クライアントが他者との交流のときに困難があることを説明するときに使った言葉と同じ言葉を、作業療法士が使うことを推奨する。例えば“うまくやる”“話をする”“一緒に仕事をする”“つきあう”など。

例えば、作業療法士がカールと協働するときに（セクション 5.7 参照）、彼が社会交流の困難さを述べるときに使った言葉を使用した。彼女は彼が“女性の顧客が仕事に口出ししてくるときにイライラする”と彼が言ったのを確認したので、彼の言葉を用いた。彼女はこのようなタイプの“議論”がどのように行われるのかを観察すれば、彼が顧客と“少しうまくいく”手伝いができるだろうと提案した。カールは、顧客と居るところを観察するという考えを笑った。彼女は彼の笑いを顧客の家で観察するという考えへの不快さの現れととった。彼女は、どの顧客が“彼にライトをつける場所を言い”たいと思うかを予測する事は難しいと同意した。そしてこれを機会に、カールが他者と意思決定をする必要がある別の機会について考えることにした。その間、彼女は、彼が他者と交流している間に観察する事は、作業療法評価の重要な部分であり、彼女は仕事を続けられるように手伝いたいことを強調した。

### 5.10 クライアントが優先的に評価や介入を希望している社会交流のタイプを明らかにする。

評価対象となる人が ESI 観察をされることに同意したら、作業療法士はインタビューを続けて、どのタイプの社会交流を観察するかに焦点を当てていく。

再び、観察される社会交流はその人が価値を置いている、そして/または、する必要がある作業の領域に関係しているものである。難しいまたは挑戦があるため観察に適している社会交流を、本人が言うかもしれないし、しないかもしれないが、理想的には、クライアントが、問題があると表明したものであることが望ましい。

例えば、作業療法士は、カールの社会交流技能を評価するために ESI を用いるという考えを提示した後、彼が仕事で成功できるようにするために、もっともよい社交のタイプについて彼と議論を始めた。彼の自己報告した問題は、女性の顧客との交流だけあり、作業療法士がさらに確かめた時、カールは、同僚とは“うまくやっている”と言い張った。

作業療法士は、カールは一人で働くのが好きであり、顧客と交流するのに問題があるので、同僚と働くときに実際には問題があるかどうか気がなった。つまり彼女は“うまくやっている”は、社会交流に困難がないという意味ではないと考えた。それで彼女は、カールの仕事に置ける社会交流をより広く見せてもらうために、次のように言った“私は異なる社会交流を観察する必要があるので、あなたの上司と話して彼の意見を聞こうと思う。彼はできる限りの事をして、あなたが仕事を続けられるように援助したいと思っていると思う。あなたと一緒に彼と会うか、電話を架けるかをしてよいですか？”

カールは、必要以上に仕事を休みたくないと考えていたので、電話の方がいいと言った。カールの上司に作業療法士が電話したとき、カールは同僚に好かれているけれども、一緒に働くにはいくらか問題があると言った。－“カールは自分のやり方であるのが好きなんだ”それで、作業療法士はカールを同僚と一緒に観察するのが良いと考えた。彼女がカールの上司に可能かと尋ねたところ、“調整できる”といった。

上の例のように、作業療法士が、クライアントが観察の際に優先したいある特定の社会交流に焦点をあててインタビューするとき、彼や彼女が (a) 実際にどのタイプの社会交流が最も重要か (例、意思決定/問題解決、社会的会話/おしゃべり)

(b) 課題環境の主要な特徴（例, 騒音レベル, 環境への慣れ）, (c) 社交相手の特徴（例, 数, 親しさ）を明らかにする事が重要である. さらに具体的には, 作業療法士とクライアントとが協働的に観察する社会交流を決定する時, 以下の事を考えるべきである.

- 関連のある, また現在問題となる場面の特性（慣れ, 騒音レベル）や社交相手について話し合うことは, ESI を使って妥当性のある評価を行うために重要である. 最も大切なことは, *作業療法士は, 人の望みとニーズに適切な, クライアントに困難が存在している, あるいは望む作業への完全な参加を制限していると捉えられている, 社会交流のみを観察するべきだ*ということである.
- 繰り返すが, (自分の問題への気づきがない人など) にインタビューするときには, その人は自分の困難や, 社会交流の質の低下が完全な参加を制限しているということを知らない可能性があることを強調しておく. こうした場合には, *評価に適切な社会交流の適切なタイプを標的にできるよう, クライアント群の他の人からの情報を慎重に考慮に入れることが大切である.*
- *単に都合がよいという社会交流において, 人を観察しないことは必須である.* その人にとって適切な困難さではない社会交流を観察することは, 妥当な結果とならず, 役立つ情報にもならない.
- *ESI 観察は, 生態的関連のある場面で行わなければならないし, 社会交流は ‘リアル’ でなければならない.* ロールプレイや行っているふりをすることは, 妥当性のある観察とはならない.

クライアント中心の実践をする中で、評価するのに適切なタイプの社会交流に焦点をあてるために、作業療法士は注意深くクライアント群の全てのメンバーからの話を考慮しなければならない。この事は特に評価対象となる人が、社会交流の質の低さに気づいていない、気づかされていない時に重要である。

## 5.11 少なくとも二つの異なる社会交流の観察の計画

### 5.11.1 ESI 観察の実行のために生態学的に適切な状況の計画

ESI 観察を計画することは、インタビューの最後の段階である。(a)評価対象となる人にとって重要なものであり、(b)クライアントが観察の優先度が高いとして決定した、社会交流のタイプに基づき、作業療法士とクライアントが、**2つの観察の時間と場所の計画を立てなければならない**。繰り返すが、観察される社会交流は、**生態学的に適切な状況で、典型的な社交相手との間で生じるものでなければならない**。

例えば、カールは、特に女性が相手で、顧客の家で働く場合に、社会交流に問題があると述べた。それゆえ、作業療法士がカールを観察するのに最も適切な状況は、顧客の家で、女性の顧客と交流しているときである。カールの上司は、カールが同僚と仕事をするとき社会交流の問題を持っているとも言っていた。それで、彼の同僚と交流する間に、カールの観察をすることも適切であるだろう。

もし、ESI 観察が何かの理由で、その人が典型的に社会交流の問題を経験する実際の状況では実行できない場合、観察は、その人が典型的に行うそれらのタイプの社会交流に従事するであろう、できるだけ似た状況で行われるべきである。より具体的には、**代わりの状況の重要な要素は、(a)似た社会交流が起こり**

(b) 実際の状況と、騒音レベルや、人数や、主要な社交相手などの要素が適合することである。例えば、人が上司と交流するところを、普段の仕事の環境で観察することが不可能だった場合（例、上司が参加する事が不可能/参加したがない、あるいはその人が病休していて職場で観察できない）の観察計画は、代替案を考えなければならない。理想的には、**作業療法士とクライアントは協働し、存在する障壁を解消する事を試みることになる**。難しければ、上司と社会交流に困難のある人が居る、別の状況を見つける事が一つの可能性である。別の可能性としては、困難のある社会交流の別のタイプをあきらかにして、それを行っているところを観察することがある。

例えば、カールは顧客の家で観察される事に不快感を示したので、同僚との交流の焦点を当てた。意思決定/問題解決は、問題となっている社会交流のタイプであり、顧客と関わっているときも同僚と関わっているところも、作業療法士が観察しない社交場面のタイプであった。カールと作業療法士は計画をすすめ、来週カールが同僚と意思決定をする必要がある場面で観察する事に決めた。

明らかに、後者の解決は理想通りではない。クライアント中心でなくなる可能性もある。その人は上司との社会交流を良くする努力をしたいかも知れないけれども、このような社会的制はあきらかに可能性を妨げることになる。それゆえに、作業療法士は可能な限りこのような障壁を克服する道をさぐる事が重要である。

社会交流が典型的に行われる実際の状況で観察する事が不可能な場合、その人は、似たような社会交流が行われるであろう代替の状況を観察する必要がある。

しかしもっと肯定的に考えてみると、重要な事は観察される社会交流がクライアントのゴールに適切であり、“リアル”であることであり、不自然でないことである。**どのような場合でも、作業療法士が同僚との社会交流のロールプレイをさせたり、だれかに上司役をさせたりすることはすべきではない。そうすれば結果の妥当性が失われる。**

最後に考える事は ESI 観察の時間である。最も良い時間は (a) 生態学的に適切か (例：仕事の後の友人との社交が問題ならば、夕方が観察を計画するのに理想的な時間だろう) と、(b) 全ての人に参加できるかということの、バランスに基づいて計画されるべきである。例えば、作業療法士が仕事時間外に評価を実行することができないかもしれない。この場合、代替りの時間 (と社交場面) が必要である。評価対象の人だけでなく友人も同意できる時間に観察がなされなければならない。

### 5.11.2 ESI 観察の間の作業療法士の役割についてクライアントに説明する

観察の計画ができれば、作業療法士は実際の評価の間に起こりうる事への準備をする必要がある。最初に、その人に、観察が評価であるということを思い出してもらうことが重要である。作業療法士自身は観察者として存在するので、交流には参加しないということも作業療法士は伝えなければならない。これは、作業療法士は、観察の間、声を聞き観察するためにそばにいて、静かにメモを取っているということを意味する。観察される人たちのグループに作業療法士をどのように紹介するか、そして/または、なぜ作業療法士が彼らを観察するかを説明することも重要である。最後に ESI 観察の場所、日程、時間について決めてインタビューを終了する。

**観察される人たちのグループに作業療法士をどのように紹介するかを計画する事は、ESI 施行の最も大事な段階の一つである。**特に職場や公共の場所 (例、レストラン、運動場) で重要である。作業療法士が観察しようとする人の、個人的尊厳を守り敬意を払う事は重要なのは明らかである。同時に、社会交流する他の観察される人たちも、作業療法士が誰か、なぜそこにいるのか気になるだろう。

評価対象となる人の個人情報や特別な問題が明らかになる事を防ぐために、作業療法士をその人が“復職に成功できるように”あるいは“遊ぶのがじょうずになるように”助ける人、と紹介するのがより適切である。

例えば、どのように作業療法士を紹介してほしいかカールと作業療法士が相談したとき、カールは同僚に、特に社会交流の問題でセラピーを受けていることを知られることは望まなかった。しかし、同僚に、作業療法士が仕事の技能を良くするために観察していると言う事は問題なく感じた。仕事のスキルについて援助するために、作業療法士が来週観察に来ると、カールから同僚に伝えるということを決めた。

ESI 観察のためのその人の準備には以下が含まれる：

- 観察は評価であることをその人に確認する
- 作業療法士は観察者となり、参加者とはならないことを明らかにする
- どのように作業療法士のことや ESI 観察を、観察される社会交流の関係する人に説明するのがいいかを決める。
- 作業療法士は静かにメモをとることを伝える

## 5.12 子どもにとって適切な社交場面を明らかにする。

子どもたちはより困難な社交のタイプを明らかにする事はできるけれども、作業療法士は子どもの理解とその経験に合う言葉を使う必要がある。

例えば、マルラは運動場で友達と遊ぶのが難しいという理由で、教師から評価へ紹介された。子どもにわかりやすい形のマルラとのインタビューの中で、作業療法士はマルラに尋ねた。

“友達と運動場で遊ぶことで何が一番すき？いつが一番友達とうまくいく？友達と遊ぶことが難しくなったとき何が起こる？”彼女は兄弟と遊ぶ時ことについてもマルラに尋ねた  
“妹や弟と遊ぶときのほうが簡単？”最後に、作業療法士は、異なるタイプの遊びを比べるように、マルラに頼んだ“私たちは、運動場で友達とするいろいろなことについて話してきたわね。-のぼり棒、ボール遊び、ただの「おしゃべり」。それらを比べてみるのはどう？いつ友達とうまくやるのが一番難しくなる？それはどうして？妹や弟と遊ぶときとくらべてどう？かれらのうまくやるのが難しくなるのはいつ？トランプやボードゲームをしているとき？「ハウス」のような「ふりをする」ゲーム？”

マルラとのインタビューをして、作業療法士は彼女の視点からマルラの社会交流の質を理解する事ができた。友達のグループとどうやっているかと比べて、彼女が妹や弟とどうやっているかと尋ねる事も、社交相手の親しさのレベルが、どのようにマルラの社会交流の質に影響するかを知るのに助けとなった。

子どもが話せないことや、話し合いに参加するだけの洞察力がなく、**子どもにインタビューするのが不可能な事**もときどきある。クライアント群の他者（例、親、先生）が子どもの社会交流に異なる視点を持っている場合もある。両親や先生がお互いに違って、子ども以上に異なる視点を持っていることもある。作業療法士は、子どもに加えて、子どもの両親、そして/または、先生にインタビューしたいかもしれない。事実、作業療法士が、子どもの両親や先生にインタビューすることは、子どもの社会交流における強みや困難を知るのに必要である。親や先生にインタビューするとき、作業療法士はこの章でのべ、表 5-1 にまとめた同じインタビュー書式を使用することができるだろう。